

楽しくなるノート作り

マインドマップ

黒板の文字をひたすら書き写しながら、「もっと楽しく勉強できないだろうか」と思ったことはありませんか。そんな子どもたちに、地図を描くようにノートを取る「マインドマップ」が好評です。授業に取り入れている学校や、発明した人を取材しました。(小5・蓮池遼太郎、中1・飯塚彩子、加藤聖大、中2・小窪友里乃、中3・横山達也、高2・三上航平記者)



関根教諭(左端)が黒板に描いたマインドマップの前で、自分のスケッチブックを見せる生徒たち

私たちは今月、東京・羽村市立羽村第三中学校で、国語の授業を参観しました。

3年A組の生徒34人の机には、スケッチブックとカラーペン。紙の真ん中に、俳句「まさなる空よりしだけざくらかな」(富安風生作)を読んでいたイメージしたしだけ桜が、思い思いの色や形で描かれています。

「『まさなる』は、どんな色?」「作者はどこにいるのかな?」関根和子教諭(50)の問いかけに、生徒たちは「水色」「木の下に座っている」などと活発に発表していきま

作者や登場人物の気持ちを考える際、自由にイメージを広げる手助けとなる。頭の中が整理できるので、鑑賞文や作文を書く時も取りかかりやすい」と、導入3年目の成果を語っています。

生徒の土屋恵さんは「思いつくままにかき込めるので楽しい。勉強したくない時でも、マインドマップなら『やろう』という気持ちになれます」。復習の時、授業で使ったプリントやノートの要点をマインドマップにしたところ、「よく覚えられた」と話す生徒も。また、3年生は京都への修学旅行の事前学習として、模造紙の真ん中に京都を象徴する金閣寺や舞妓さんなどを描き、訪問するお寺や神社を調べてマインドマップにまとめるなど、グループ学習にも活用しています。

英国の学者発明 150か国で利用

英国の学者トニー・ブザンさん(66)が発明したマインド



ブザンさん

マップは、約150か国のビジネス、教育の現場に広がっています。日本では、一昨年に設立されたブザン教育協会(東京)が、インストラクターの養成や学校への出張授業に取り組んでいて、協会公認のインストラクター資格を持つ教員は約50人います。

私たちは、今月来日したブザンさんにインタビューしました。マインドマップを思いついたのは、「『生懸命ノートを取って勉強しているのに、頭がどんどん悪くなっている』という状態で、テストが怖かった」という大学生の時。ノートからキーワードを抜き出し、線で関連づけたら、いろいろな色で絵を描いたりする方法を試したところ、成績が上がったそうです。

ブザンさんは「日本には漫画というすぐれた文化があり、絵が上手な子どももたくさんいる。遊び心を持って学びましょう」とアドバイス。著書の一つ『勉強が楽しくなるノート術』(ダイヤモンド社)には、科目ごとの活用例のほか、夏休みの計画の立て方、手紙の書き方などの項目もあり、マインドマップが幅広く役立つことを伝えていきます。